

カンキツにおけるクワミハムシとカネタタキの被害と防除薬剤

両種はマイナー害虫に位置づけられ、大きな被害を発生させることは稀とされていた。その中で、本年は松山市北部で広範囲に渡ってクワミハムシの被害が発生するなど、近年は被害が増加しつつある。そこで、両種に有効な防除薬剤を紹介する。

クワミハムシ



花弁を食害するクワミハムシ

本種は年2回発生し、成虫のみが加害する。4月～5月の発生では春芽や花弁を食害し、7月以降の発生では夏芽に加え、幼果を舐めるように食害する。

合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤は、散布1日後の殺虫効果が高かったが、残効性は低かった。**オリオン水和剤40やスミロディー乳剤は殺虫効果や食害抑制効果が高く、残効も長い傾向が見られた。**



クワミハムシの被害（左から子房、夏芽、果実）

供試樹：ポット植え伊予柑
試験方法：ゴースネットで被覆した新梢に、5頭ずつ放虫し、2日後調査。
試験期間中の降雨：2.0mm

カネタタキ



カネタタキ成虫（上♂、下♀）



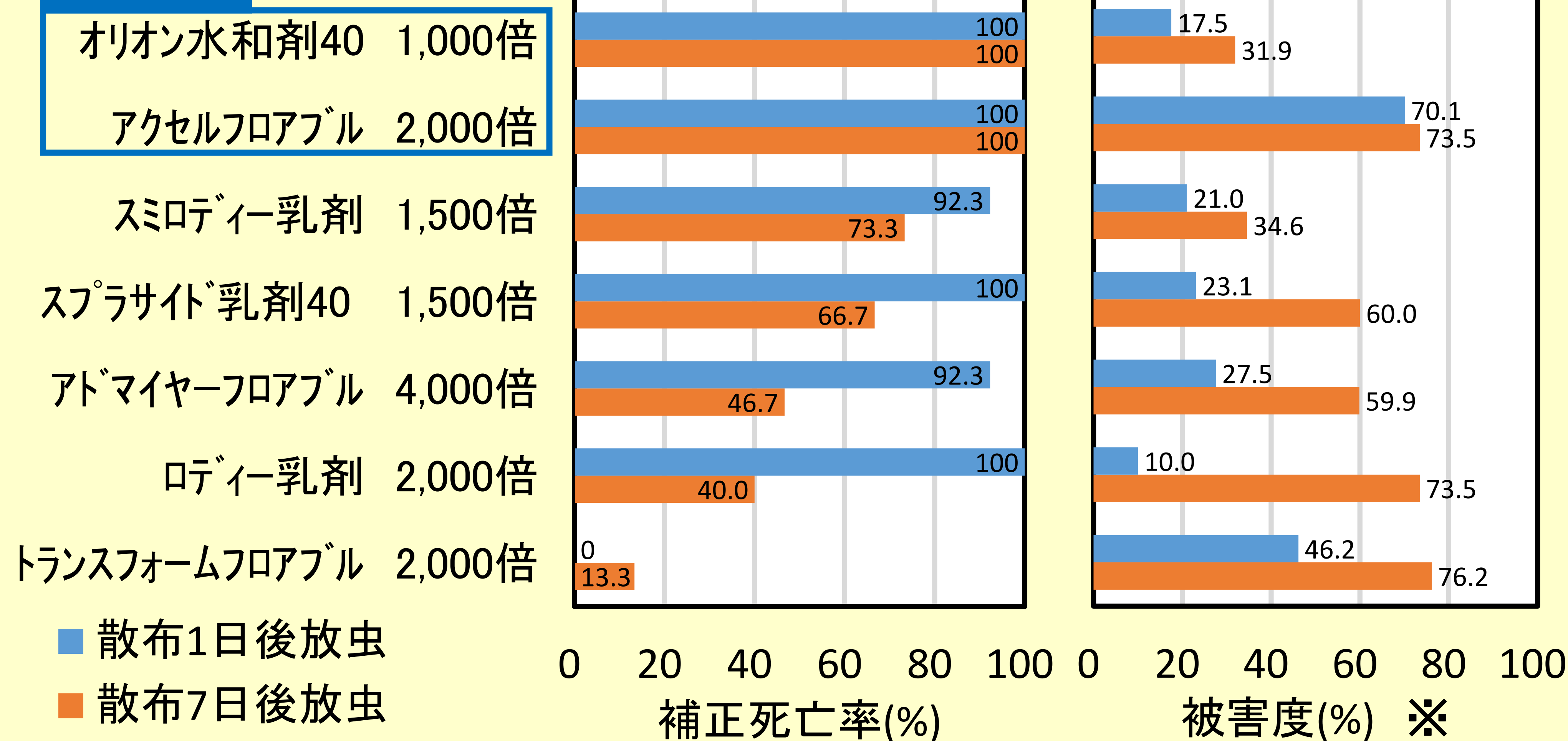
カネタタキの被害（左:前期被害、右:後期被害）

本種は年1回の発生で、6月下旬～7月上旬に幼虫が発生し始め、8月中下旬に成虫になり、8～9月に園内密度が最も高くなる。幼果期は表面をなめるように食害し（前期被害）、成熟期～収穫期は深くえぐったように食害する（後期被害）。

オリオン水和剤40、スミチオン乳剤、テルスターフロアブル、ハチハチフロアブルの防除効果が高かった。

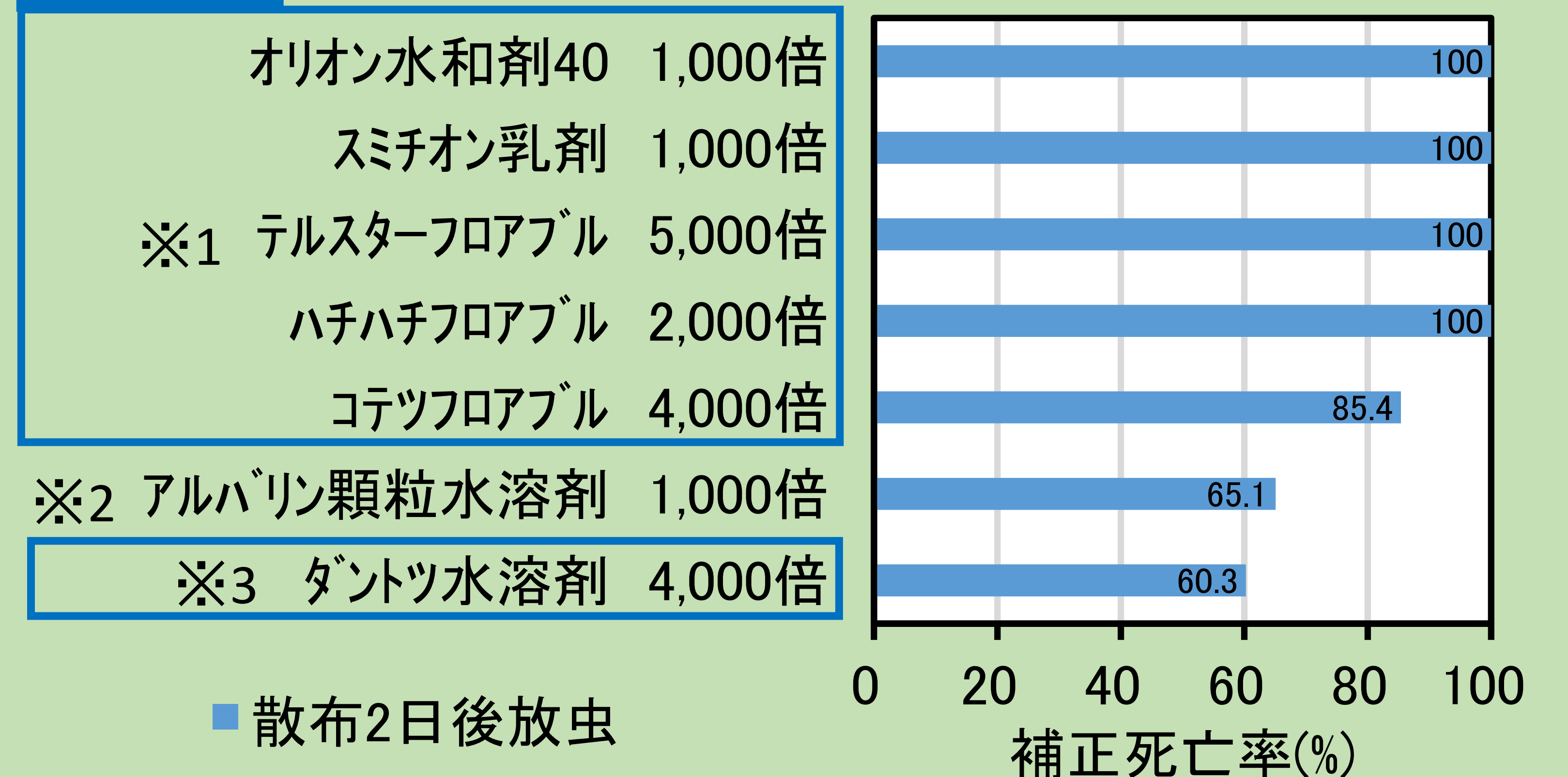
供試樹：宮川早生(25年生)
試験方法：タマネギネットを被覆した着果枝に10～15頭ずつ放虫し、2日後に調査。
試験期間中の降雨：9.5mm

登録あり



※被害度 無処理区の被害葉率を100%としたときの被害葉率

登録あり



※1 テルスターフロアブルは3,000倍で登録がある
※2 アルバリン顆粒水溶剤は現在カネタタキに登録がない
※3 ダントツ水溶剤は2,000倍で登録がある